

構想の実現状況等（概要） ※得られたアウトカムを含む構想の実現の観点から記載すること【1ページ】

【I. 事業全体の取組について】

本学の構想は1. 地域社会のグローバル化とあらゆる国の産業基盤を牽引する TECH LEADER を養成し、2. イノベーションの創発や世界的研究者ネットワークの ASIAN HUB を形成する中核的工科大学を意図したもので、その方策として①人材の魅力化、②カリキュラムの魅力化、③場の魅力化に取り組んできた。

①人材の魅力化の観点からは、「海外教育連携教員派遣事業」による教員組織の国際化を全学で進めた結果、学生交流プログラムの構築といった国際教育連携が拡大したほか、国際共著論文や研究助成の採択などの研究面での国際ネットワークも拡大した。また、本学の強み・特色であるデザインを中核として3つの重点分野を特定し、分野連携を推進する体制として未来デザイン・工学機構を整備、海外大学等延べ240機関以上との協働を行った結果、世界三大デザイン賞である「iFデザイン賞」「レッドドット・デザイン賞」のダブル受賞をはじめ、76件の国内外のトップレベルの受賞につながるなどの成果が見られた。事務職員の国際高度化に向けた取組も行った結果、事務組織全部署へのTOEIC730点以上取得者の配置が可能となり、各課での外国人留学生・研究者対応が可能となった。

②カリキュラムの魅力化では、学士課程から博士前期課程までの6年一貫教育及びその後の博士後期課程を見据えた3×3構造改革や、クォーター制によるカリキュラム・学年暦の柔軟化により海外留学がしやすい環境を整備した。また、英語鍛え上げを目的に多読多聴を主眼に置いた語学力向上プログラムを実施し、TOEIC730点以上を有する学生数が2013年度197人から2023年度1145人と約6倍に増加した。海外大学との教育連携も進み、チェンマイ大学とのジョイント・ディグリー・プログラム（2017年度）、トリノ工科大学（2018年度）、ベニス大学カ・フォスカリ校（2019年度）とのダブル・ディグリー・プログラムの経験を踏まえ、2021年度に、ロンドン芸術大学とのオンライン共修を含むダブル・ディグリー・プログラム、欧州側の競争的資金を獲得してのゲント大学をはじめとする欧州5大学と本学のコンソーシアムによるマルチプル・ディグリー・プログラムを開設するなど国際共同学位プログラムの構築が進んだ。

③場の魅力化にかかる事業として開設したグローバルコモンズにおいて、留学生スタッフによる交流企画Mcaféや留学説明会の開催等多彩な取組を実施し、毎年約5,000人が利用、異文化理解の醸成とともに海外留学者の増加に寄与した。また南禅寺何有荘洋館の国際交流拠点化では、本学への施設移築自体を教育研究プロジェクトの場として活用、2021年の竣工後は国際交流・異分野交流の拠点として、海外からの来訪者との交流活動等に活用している。

これらの本学の3つの魅力化の取組が有機的に奏功した結果として、TECH LEADER 指標によるルーブリック評価において、リーダー志向やグローバル志向を有する学生の割合が事業開始時より大幅に増加するなど、TECH LEADER の養成が進捗、本学学生のインターンシップを受け入れている地域企業からも、本学の学生が異文化コミュニケーションを積極的、実践的に行う点などが高く評価されている。また、ASIAN HUB の形成の観点からも、3つの重点分野において研究ユニットの誘致を中心とした国際共同プロジェクトを積極的に展開してきた結果、外部資金の受入金額の増加に示される研究力の強化、国際交流協定数の増加に示される国際ネットワークの強化、世界大学ランキングの上昇に示される国際的認知度の向上などの成果が見られた。また、地域企業からも、企業が相談できるアカデミアとしての存在感の大きさを評価されるなど、世界と地域をつなぐハブとしての役割を着実に進展させることができた。

【II. 事業期間での大学の成長（アウトカムとの繋がり）】

大学の成長として、第一に、大学組織としての国際化が進展（組織文化の変革）した。特に学長をトップとした機動的な事業推進体制を構築したことで、学内の多様な取組の意思決定において、戦略的に国際的な観点を横串とすることが可能となった。また現場レベルでも、海外教育連携教員派遣事業や国際化モデル研究室事業を通じた研究室における国際化の常態化と、事務組織全体の英語力向上による国際対応能力の向上により、国際が特別なものではなく自然体で国際化を進める気風が醸成された。第二に、学生の留学・国際交流参加の環境が多面的に整備され、TECH LEADER 養成の環境が整った。3×3教育制度の導入等による留学のための時間的余裕の創出、学生の英語力の向上や学内での共修機会増加による心理的障壁の低減、国際共同学位プログラムや短期派遣プログラムの整備を通じた留学機会の増加、グローバルコモンズを通じた留学相談や留学生支援の充実などの成果があがった。第三として、学内の変革だけでなく、地域社会の中で本学の存在感が拡大した。学内組織KYOTO Design Labでの活動等を通じた国内外の卓越した研究者を交えたセミナーの開催やその地域への公開、本学の強みを活かした地元企業等を対象とした起業支援プロジェクトやリカレント教育プログラムなどを展開し、地域や社会に開かれた工科大学への取組を行った成果が、地域の産学連携プラットフォーム「京都クオリアフォーラム」（参画機関：8企業、7大学）における人材育成グループの幹事校という本学の役割にも象徴されている。

特筆すべき成果（グッドプラクティス）【1ページ】

【Ⅰ. 事業全般について】

(1) 教員組織の国際化と海外連携の拡大：

「海外教育連携教員派遣事業」により計 67 名（在籍教員の約 3 割）を海外の大学等に派遣したことで、国際教育連携、国際研究連携が大きく進展した。外国人教員の採用も推進した結果、倍増し、学内教員組織に国際化の意識が浸透した。また、本学が重点をおく 3 分野「デザイン・建築」「繊維材料・高分子」「グリーンイノベーション」において、各分野の先端の大学との機動的な交流協定の締結と一線級研究者の招へい、連携事業を活発に行った。具体的には、スイス連邦工科大学チューリッヒ校（QS 世界大学ランキング 2024：7 位）との 3D スキャニングの活用や再生建築に関する連携事業、スイス・イタリア語圏大学メンドリシオ建築アカデミーとのジョイントスタジオの実施等、世界的影響力を持つ機関・人物等との協働が増えた。その結果、本学の KYOTO Design Lab が主催した展覧会と書籍が、iF デザイン賞、レッドドット・デザイン賞といった世界的権威のある賞を受賞するなど本学の社会的評価が高まった。

(2) 3×3 構造改革、クォーター制導入によるカリキュラム・学年暦の柔軟化、入試の改革：

学士課程から博士前期課程までの 6 年一貫教育及びその後の博士後期課程を見据えた 3×3 構造改革 を実施した。この改革による学部 4 年次の大学院科目の先行履修やクォーター制を取り入れた学年暦・学事暦の柔軟化により、多数の学生が海外インターンシップへ参加するなど TECH LEADER 養成のための教育システムを構築した。また、国際バカロレア等有資格者をはじめ多様な経験を持つ人の受け皿として 2018 年度にダビンチ(AO)入試におけるグローバル枠を新設、独自開発した CBT 方式の英語スピーキングテストを入試で実践、2024 年度入試からは CBT テストのシステムも全て学内開発した。この CBT テスト実施プログラムは連携大学 4 校に横展開したほか、そのノウハウの公開を目的に 2023 年度にシンポジウムを開催した。

(3) 英語鍛え上げプログラムの実施

学部段階で英語力向上を図る 英語鍛え上げプログラム を実施、毎授業の課題や e-learning を用いた多読・多聴の実施による多量のインプットを行う授業を展開した。加えて、TOEIC スコアレベルを基準とした科目設計や英語スピーキングテストを授業に取込んだカリキュラムを 2016 年度に導入した結果、TOEIC スコア 730 点以上を取得する学生数が、2023 年度にかけて学部学生は 7 倍、大学院生も 4 倍（2013 年度比、学部 107 人(3.6%)→754 人(28.8%)、大学院生 90 人(7.7%)→391 人(28.7%)）に増加するなど、学生の英語運用能力が大幅に向上した。これらの取組は文部科学省からも好事例として取り上げられた。

(4) 海外大学とのジョイント・ディグリー・プログラム(JDP)、ダブル・ディグリー・プログラム(DDP)

2017 年のチェンマイ大学との国際連携建築学専攻 (JDP) 設置、オルレアン大学とのコチュテル協定締結、2018 年のトリノ工科大学、2019 年のベニス大学カ・フォスカリ校との DDP に加え、2021 年にはロンドン芸術大学とオンライン共修を伴う DDP と、欧州の競争的資金を獲得してのゲント大学をはじめとする欧州 5 大学とのコンソーシアム型 マルチプル・ディグリー・プログラム を開始した。これらの多様な形態の国際共同学位プログラムの導入は、学生の留学機会の拡大と本学の国際通用性向上に寄与した。

【Ⅱ. コロナ禍への対応について】

(1) オンラインを活用した国際交流プログラムの導入

- ・ Virtual Exchange 授業の導入：2020 年度に海外での短期英語研修に代わる活動として、モンス大学との間で ライブ型とオンデマンド型を併用する交流型授業を学部の必修科目の一部に導入。コロナ終息後も継続し、2023 年度には相手先にポルトガル、スペイン、ブラジルの大学を追加した。
- ・ 2020 年度に オンライン留学の試行プログラムとして、協定校のノースカロライナ州立大学が実施する「異文化適応力向上講座」への参加、コロナ後も留学意欲の向上と実践的な英語活用の機会として継続し 2023 年度までに 5 回実施、参加学生の満足度平均点は 8.3/10 点と非常に高いものとなった。

(2) 既存の交流事業のオンライン（ハイブリッド）化：

KYOTO Design Lab が 起業家育成プログラムとして毎年開催している「Kyoto Startup Summer School」や、スタンフォード大学発（本学は日本の大学で唯一参加）の 国際産学連携イノベーションプログラム「ME310/SUGAR」のプロジェクト推進・成果報告会、国内外の研究者や産業界関係者等を交えた OPEN TECH シンポジウム等をオンラインで開催した。OPEN TECH シンポジウムはコロナ後もハイブリッドで開催することで、世界 20 か国から参加を得たケースもあり、より幅広い層からの参加が得られる効果があった。